

幼稚園・小学校・中学校の子どもの環境認識の発達と環境学習に関する研究

1. プロジェクトメンバー

木全清博	教育学部教授（研究代表者）
近藤文良	教育学部教授・附属幼稚園長
杉江淑子	教育学部教授・附属小学校長
千原孝司	教育学部教授・附属中学校長
西川昌晃	同 附属幼稚園副園長
板谷 薫	同 附属幼稚園教諭
瀬古祐嗣	同 附属小学校副校長
西村喜雄	同 附属小学校教諭
谷村昌則	同 附属小学校教諭
河口眞佐男	同 附属中学校副校長
澤田一彦	同 附属中学校教諭
西村淳子	同 附属中学校教諭

2. 研究の目的と計画

滋賀大学教育学部附属幼稚園、小学校、中学校は、大津市膳所地区の同一キャンパスにあり、幼稚園から小学校、中学校の12年一貫教育を推進している附属学校園である。12年間の子どもの環境認識の発達・成長の姿を継続的に研究できる好条件にある。1990年代半ばまで、各学校園が独自に教育理念、教育目標を掲げて、各学校園の校内研究を進めて、毎年春・秋に公開研究発表会を実施してきた。近年になって、12年一貫カリキュラムの研究を通じて、各学校園の教育内容を互いに交流し合うようになってきたものの、現実には校種間の壁は高くなかなか共同した研究テーマが定めにくかった。

滋賀県に立地した附属校園としての独自性を出していきながら、かつ各学校園が現実から要請されているテーマである環境学習を共同研究にするならば、この課題を克服出来るであろうと考えた。環境学習の目標・内容・方法の研究ならば、大学の研究者の援助や協力も得やすいし、12年一貫教育の教育的成果を検証しやすいのではないかと考えて、研究テーマを設定した。

研究計画は、前年度から始めて2年目になるが、前年度に引き続いて(1)子どもの環境認識の発達段階をふまえた環境学習のあり方を探る方法として、各学校園の環境学習の指導事例として、環境学習に関する指導案を幅広く収集して、ファイルにまとめる作業を継続的に行った。各学校園で実施している環境学習の教材一覧表を作成し、小・中

学校の琵琶湖学習、びわこタイムの内容を検討する。(2)幼稚園5歳児の保育授業と小学校低学年の生活科授業の相互の参観を通じて、子どもの環境認識の実態を把握する。また、小学校高学年と中学校の児童・生徒の社会・理科・技術家庭の環境学習の授業を相互に参観する。(3)ILECの環境指導者講習会などの外国人にむけて、各校園の環境学習の実際を授業公開して、環境学習の国際交流の実績づくりをする。

二カ年の計画で行ってきたので、本年度の研究成果を来年度の教育学部紀要、あるいは滋賀県教育委員会への環境学習の実施報告書などへ報告する予定である。

3. 今年度の活動状況

活動内容とその総括

本年度の研究活動は、6月中旬から7月上旬にかけての附属幼稚園の保育に関するカンファランス、附属小学校の授業を語る会、8月の附属中学校の明日の授業を考える会や、10月から11月での幼稚園、小学校、中学校の公開研究発表大会において、相互にそれぞれの校園から授業公開や研究会に参観した。附属校園の場合は、教育実習が長期間にわたってあるので、その後でないとは教員は研究に取り組めないのである。

幼稚園では、身近な環境の中で「好きな遊びをする」保育実践で、3歳児の6月に「ぼくの私という気持ちができる」ので、気持ちを受け止めながらやりたいことをさせる保育をしている。5歳児では「好きな遊びをする」保育実践があるが、ここでは子どもの発達段階を反映して、石けん遊びや電車ごっこ、ままごと遊び、遊具、工作に取り組んでおり、遊びが目的意識化されており、長時間継続出来るようになっている。5歳児の11月末には、木工づくりで家や小物を作り、町づくりへと企画力や構想力をもった遊びへと発展している。

小学校では、低学年の生活科1年に「なぎさ校園で遊ぼう」単元が総合学習で重視されている。春夏秋冬の四季を変えてなぎさ公園に出かけて自然とふれあう体験学習を行っている。2年の生活科で琵琶湖にかかる「橋をわたろう」の生活科授業を実施しており、3年の地域学習「相模川探検隊」実践につないでいく。さらに、4年では琵琶湖を取り巻く3つの山に登る校外学習で三上山、比良の打見山、

三国山の登山が行われている。山上から琵琶湖を見下ろす学習であり、5年ではフローティング・スクールで一転して、船に乗り琵琶湖の湖上から周りの山々や湖岸の平野を観察する学習になっていく。6年は総合学習「琵琶湖の自然環境を知る」で、滋賀の環境問題についてのデータを使った、多様な情報を集めて、滋賀県の未来の環境を考える授業が行われている。

教科学習では社会科4年の「水のリサイクル」学習が浄水場や下水処理場の見学と自分たちで浄水装置づくりを行った学習をしている。5年の「環境を守るびと」学習では、琵琶湖の良さをポスター制作の現場から考えさせる授業が行われた。アートディレクター、写真家、作家、ヨシづくりの専門家など、地域で琵琶湖の環境保全に力を尽くす人たちに学校に来てもらったの授業である。

中学校では、すでに4半世紀に及ぶ「BIWAKO TIME」という琵琶湖を中心とした環境学習が実践されてきていることは周知のとおりである。近年では総合学習として位置づけられて、次のように定式化されている。生徒が「学び方を学ぶ」学習として、全校で先生方が協力して取り組んでいる。「自然」「人と自然」「人」「人と社会」「社会」の5つのテーマを自分で選択して、異学年合同グループの編成、

夏休みを挟む40時間学習、サテライトルームの活用、調査活動の中間発表会の実施、領域ごとの全体発表、を特徴にした学習を組織している。

生徒の選択したテーマは環境学習そのものであり、2006年度では自然領域には「滋賀県の植物で作る料理」「水

性生物とその環境」「素室による動物と植物の変化」「地質からわかる滋賀の環境」などの16テーマ、人と自然領域には「農薬野菜は人間の敵」「大津の湧き水」「近江野菜と農業」「棚田」「近江里見八景伝」など9テーマが、ポスターセッションやビデオづくり、OHP資料など、多様な発表方法を使って報告している。

附属中学校においては、附属小学校の生活科や社会・理科、総合学習などで行われた体験学習やフィールド・ワークでの環境学習の上に立って、13年の生徒の協同学習が組織的、系統的に展開されているといえる。

附属小学校は、附属幼稚園での豊かな遊びの実践を広げる形で、遊びを通して身近な自然、社会、人間についての関わり合いを深めさせて、附属小学校の生活科実践につないでいるといえよう。

なお、ILECの学校訪問は昨年度より、10月に附属小学校で1日、附属中学校で1日の授業参観と学校見学を行っている。今年度の附属小学校は、3年理科の「光をあてようー太陽の光でお湯をわかそうー」の授業公開し、英語版で指導案を配布した。

本研究は、2カ年の附属学校園の環境認識に関わる実践を整理して、今後の課題と展望を見出すことをテーマに掲げたが、現実に行われているそれぞれの環境学習の実践を集約するだけで終わった感であり、今後は学校園間での相互の環境学習の実践交流の可能性を探るとともに、教員の環境学習研究会の交流も含めて考えていきたい